はじめに

――河原田研究班の成果と課題（2年間の軌跡を振り返って）――

高江洲 昌哉

1. はじめに

本報告書は、「河原田盛美における本草学的知識から近代勧業的実践の転換に関する研究」というテーマのもと、2014年度から2015年度の2ヶ年にわたって調査・研究をしてきた成果をまとめたものである。本報告書は、収録された10本近くの論稿を通読することで、河原田盛美（1842-1913）の思想や活動を万遍なく明らかにし、1つの到達点を提示するというよりも、多様な論文を配列することで、河原田に焦点を当てつつ、そこから拡散していく呈を示しているといえる。ある意味で、テーマに沿って研究を進めたというよりも、テーマを踏み台に、河原田の活動（作成した資料）と対話をしながら研究を進め、論文を仕上げてきたとまとめることができる。それでは、何故このような経緯にいたったのか、簡単ながら、当研究班の軌跡について、奨励研究採択前の活動から述べていくことで、読者に理解の一助を供したいと思う。

本研究班のメンバーのうち増田昭子氏・中野泰氏・中林広一氏・筆者は、当研究着手に先立ち、2012年に河原田盛美の『沖縄物産志』が東洋文庫のシリーズとして刊行することが平凡社で認められたので、それを刊行するために集ったメンバーである（以下、東洋文庫メンバーと略記）。他の東洋文庫と同様、解説と注の作成を充実させるため、国文学研究資料館に所蔵されている河原田盛美関連史料[1] 以外の史料を確認するために、2012年の8月に南会津町にある河原田家を訪問し、河原田家の史料を調査したことが本研究の出発点になる（『沖縄物産志』は、『清国輸出日本水産図説』と併せて、河原田盛美『沖縄物産志　附・清国輸出日本水産図説』として2015年3月に刊行された）。ちなみに、本研究課題も校注作成時の議論をもとに設定したものである。

増田氏・中野氏・筆者らは年3回ほど南会津町を訪問し、河原田家の史料調査にとりかかることにした。この河原田家史料は、『伊南村史』編纂のために、村史編纂委員会が調査をしており、悉皆調査ではないが、中性紙箱に概要的にまとめ、薄葉紙に複数の史料を一括的に包み込むというかたちで、保管されてきた状態であった（写真1）。東洋文庫メンバーはこれらの箱を開いて、資料を調べるということを都合7回ほど（2012年8月から2014年5月まで）おこなった。

さて、本研究テーマ設定に至る過程を述べる前に河原田盛美について一言述べると、『河原田盛美履歴』（写真2）という資料もあり、河原田の生涯は知られていたが、前半の「琉球処分」への関与（内務省琉球出張所長）と、農商務省の水産局官僚（主に水産巡回教師として全国各地を巡る）というように、活動歴が幅広いため、個別に取り上げられることはあったが、各活動歴をつなげて、河原田の全体像を捉える（歴史的位置づけを考える）という視点は弱かった[2]。もっとも、取り掛かった当初の我々の河原田への関心も、高江洲は研究領域から沖縄での活動を起点とするものであり、中野は、漁業と民俗をテーマにしていた関係から、「水産翁」と呼ばれていたように河原田の水産方面の活動からの接点[3] であった。

こうした専門／関心テーマによって関心の力点に違いはあったが、幸いなことに、メンバーは個

写真１　以前の保管状態

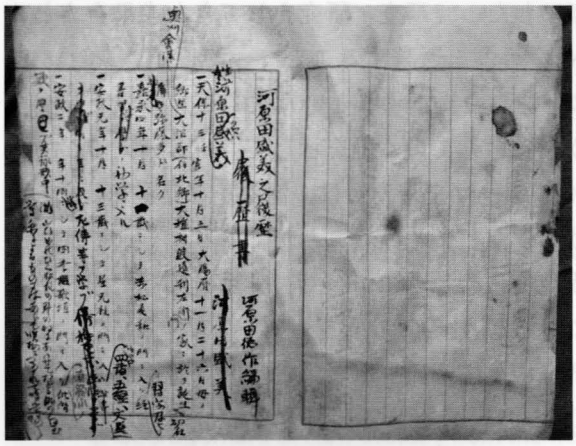

写真２　河原田盛美履歴の一部

写真３　書画目録（離任時の梁得功より書寄贈の件）

別テーマに固まることなく、異種混合であったので、個別の関心を踏まえての発言に触発されることが多かった。さらに、それぞれの関心がどのように結びつくのか、河原田の多様な活躍をどのように総合的に把握するか、または、その結節点は何なのか、それらを探すことのために出発当初から活発に議論をしてきた。

次に、河原田家の蔵にあった史料を整理しながら、これまで広く知られていなかった史料（①沖縄・水産関係の軸物類）[4]（写真3）、②与論島司を勤めていた前後に作成したと思われる奄美諸島関係史料、③薩哈連水産会社関係史料（明治14年）、④増田の研究テーマとなる退官後、福島県会議員としての活動といった地元の開発貢献に関する各種感謝状などの史料、その他）を確認していくなかで、河原田家史料の整理をおこなう必要性を感じるようになってきた。

東洋文庫の刊行作業が本格化する中で、「沖縄物産志」と『清国輸出日本水産図説』をセットにして刊行する必要が何故あるのか、単に河原田の著作という括りだけでなく、一見すると全く異なる著作物がどのようなつながりをもっているのかを読者に提示することが、東洋文庫メンバーの大きなテーマになっていった。それは河原田の官僚としての位置づけであったり、または琉球在官時代から巡回教師に至るまでの、彼の物産への関心とそのバックボーンとなる思想をどのように評価（連続／断絶）するかという点でもあった。

このような議論を重ねていく中で、唯一河原田の全体像に目配りをした鎌田論文をどのように批判的に継承していくかということが課題になってきた。鎌田論文は、河原田の階級的立場を「豪商豪農」とし、「こうした階級的な立場に立脚して彼なりに追求した自らの政治指向は、権力―当面の成立したばかりの大久保政権の内部に行政官僚として入り込むことによって実践に移されて行くのであるが、その行動は常に（尚古派）農学徒としての水産行政学の検証・普及と表裏一体をなしていた点で、いわばその経世済民的な思考・行動様式が生産諸条件の改革―現実の生産者の保護・育成を第一義とする行政の立場を、本質的に持ち続けている」[5] という位置づけをおこなっている。単に鎌田氏のバックボーンであるマルクス主義歴史学の用語を、現代風に読み換えるのではなく、河原田に即して、明治期の活動を評価するかということが、本研究の出発点であ

ると自覚するようになってきた。それでは、どのように批判的に継承していくのか、鎌田論文から出てくる問題点を挙げてみたい。

第1点として、履歴から確認できるように、佐藤信淵の家政学などを吸収し、殖産に対し積極的な姿勢であり、また、家業の経営、読書歴からわかるように、「改良」という視点も一貫して存在しているが、それを単に欧米の学問体系ではないというだけで、(尚古派) 農学徒という評価だけで済ませられるのか (その近代的意味付けを考える)。

第2点は、鎌田論文では具体的に分析していない、河原田の水産業への関心と役割をどのように評価するか (琉球在勤時代と農商務省時代をつなげて思想と行動を考える)。

第3点は、専門官僚以前の官僚たちの知識と実践をそれ独自に評価するには、どのような評価軸が必要かというものであった (専門官僚登用以前の官僚たちの歴史的役割の解明)。

先行研究の読解を通して出てきた課題を修正する形で、資料調査と東洋文庫刊行に向けて議論をしてきたことから出てきた課題 (一部重複はあるが) をあげると、

(1) 琉球—水産業を連関させるキーワードは何か (単に「物産への関心」として言い切るのではなく、どのように説明言語を豊富化していくかという点)

(2) 河原田の知識はどのようなものであったと提示することができるか

(3) 地元での産業振興も視野にいれて、全生涯から河原田の活動を考える (先述が琉球在勤時代から農商務省時代であったとするならば、こちらは退官後の地元での活動が視野に入ってきたといえる)

これら3点にまとめなおしてみた。東洋文庫メンバーは、これら課題を踏まえ、「特定の人物に焦点をあてて、近代を考える」という意味を考えながら、議論を進めてきた。

こうして、沖縄時代と水産官僚時代にどのような連続点／断絶点がみられるのかを注視し、「沖縄物産志」を執筆するような知識のありようと、水産巡回教師での役割を統合的に考えるようになった。その結果、(1)「専門官僚が活躍する以前に活動した河原田の役割」、(2)「河原田の知識の特質」という点が明瞭になってきたので、これら論点を結びつけるために、「知識」というものに焦点をあてるようになった。このような議論を経て、「河原田盛美における本草学的知識から近代勧業的実践の転換に関する研究」という研究テーマ (以下、本テーマと略記) に落ち着くことになった。

ここでいう本草学とは、①日常生活に役に立つかどうかを考究する (「民生日用」の学としての) 視点、②名と物の対応を重視する「名物学」の視点で身の周りにある動植物などを考察する学問と定義しておく[(6)]。こうした素養を持ち、著述をおこなっているが、河原田は思想の専門家ではない。また、古典を引用する叙述スタイルをとっているが、効用を重視している点などを考慮し、河原田の生活実践の必要上から、実践の背景となる知識を、どのように限定をつけ特質を浮かび上がらせるかということに留意した結果、その知識を「本草学的知識」と名付けて、河原田の実践を検証することにした。

2. 研究課題と研究班の活動履歴

河原田の活動と意識を、経歴にそって考えると、以下のような10の特徴をあげることができる。

1) 農業だけでなく、商品作物栽培による物産への関心

2) 尊皇意識と戊辰戦争を経験

3) 近衛家とのつながり (写真4、5)

4) 内務省出張所長として、琉球に赴任した

5）明治維新後も会津藩との関係あり

6）早くして官界に入ったので、自由民権運動といった在野の政治運動の経験はなし

7）内務省・農商務省と官界で活躍

8）農商務省時代は水産巡回教師として全国を歩く

9）多くの書物を著し、文書の保存にも気を付けている

10）退官後は、県会議員になるなど地域振興に尽力

これら特徴を踏まえ、研究班は3つの課題でそれぞれの調査に着手した。

（1）水産官僚の視点から解明する水産業の近代的展開の解明

（2）地方実業家としての活動の解明

（3）河原田家の所蔵文書の整理分析

調査を進める中で、以下の点を解明することができた。

写真4　書画目録（近衛家との関係）

写真5　近衛篤麿逝去後の遺物寄贈目録

河原田には、皇国観と開化観（文明化志向）が同居している。また、「国益」への早い段階からの関心があった。河原田のこうした特徴は、河原田自身の明治という時代への適応（変化）といえるであろう。ひとまずこれを「勧業報国」の姿勢と定義しておく（他者に提示する政策（目的）としての「立国」ではなく、勧業に従事することで国の発展に寄与する、自己を奉仕させるという意味で「勧業報国」と名付ける）。「勧業報国」という姿勢は、「万国」に対峙し立国を図るという新時代に相応しい実践といえる。そうした観点で見ると、河原田の「勧業報国」の実践は、琉球在官時代、農商務省時代一貫したものといえる。

また、「国益」のため、売れる商品を作るという意味で「改良」の視点は強いが、もう一方で地元のやり方というものにも関心を寄せている。単に本からの知識を「天下り的」に強要したわけではない。彼にとって、思想とは実践・判断の基準であり、生活に根差したもの（思考の体系性を目指したものではない）といえるので、そうした観点から、今後深めて分析する必要がある。

3. 河原田家所蔵調査からわかった点

河原田盛美に関する史料は、渋沢敬三が収集した祭魚洞文庫を経由し国文学研究資料館に所蔵されるようになった経緯から、1971年に鎌田永吉氏が前述の「河原田盛美・史料ノート」を公表し学会でも注目されてきた。国文学研究資料館所蔵史料以外の南会津町の旧河原田家所蔵史料についても、前述の鎌田氏も言及されており存在は知られていたが、十分に活用されることなく現在に至ってきた（一部は、『伊南村史』で翻刻されているが、村史の性格上、伊南村以外の情報を有する史料は重要でも除外されている）。

鎌田氏、池田氏が紹介をしているが、十分に活用されることのなかった南会津町宮沢の河原田家

史料は、以上述べたように、明治期に活躍した河原田盛美が作成・収受した文書を中心に近世期から近代に亘る約数千点近くの史料からなる。近世の河原田家史料は、多くの旧家資料にみられる家業・家産関係をはじめ、和書類を中心とするもので、伊南地方の豪農（農業と商業を中心に経営を行ってきた）の生活と教養を確認する史料からなる。

南会津町にある河原田家史料は、盛美の日記である「東山日記」や「河原田盛美履歴」、「河原田文庫目録」といった基本史料をはじめ、明治維新後、官界に入り大蔵省・内務省・農商務省で官歴を積み退官後は福島県会議員をつとめるなど地元に貢献する活動によって生じた文書、辞令書や書簡類からなる。特記すべきものとして、内務省時代に琉球藩内務省出張所長として「琉球処分」初期の政策に関連したもので、琉球藩時代の沖縄で作成・収受した文書（モノ資料含む）がある。河原田家の沖縄関係史料には、沖縄県にも存在しない史料も含まれており、歴史的に貴重な史料である。また、農商務省時代は水産局に勤務し、水産巡回教師として全国各地の水産加工・技術の改良に従事し「水産翁」と名付けられるような活躍をしており、近代日本の水産史において欠かすことのできない人物の史料である。国文学研究資料館以外に、活字化された報告書や著作といった盛美の水産関係史料は大学図書館などに所蔵されているが、南会津町にある河原田家史料にも全国巡回時に作成・収受した史料や鯣図など水産史研究において歴史的価値のある史料が多数残されている。退官後、帰郷した盛美の、地元の産業育成などに関与した計画書や感謝状もあり、南会津の近代史を研究するうえでも、重要な史料が残されている。

また、盛美が戊辰戦争後に近衛家との縁を得た関係で、近衛家から頂いた資料も存在する（書簡などが中心）。盛美の次の代の盛雄が作成・収受した文書や養子である稼吉に関する史料も含まれており、盛美以外にも南会津の政治史に重要な役割を担った河原田家の史料も残されている。

以上みてきたように、南会津町にある河原田家史料は、史料的価値が低いので、国文学研究資料館に所蔵されなかったわけではなく、偶然の結果として宮沢の河原田家に残された史料である。これら史料群は、地元南会津郡にとどまらない、近代日本の軌跡（「琉球処分」や水産業の近代化）に関与した人物が作成・収受した史料を中心としているので、地域名望家史料とは一部異なる特異性を有している史料群であると位置づけることができる。短期間による調査のため、部分的な写真撮影・目録化であり、悉皆調査として取り組むまでにはいかなかった。それでも、研究の基礎作業を固めることができた。

今回の調査で、河原田家に蔵書目録が3冊あることを確認した[7]。本研究班は、盛美の知識のありように注目していたので、その軌跡を探るうえで、蔵書は大きな意味をもっているが、蔵書類が大方喪失しているなかで、こうした目録が残っていることは、盛美の思想の特質及び軌跡を探る上で貴重な資料といえる。特に河原田の蔵書目録は、刊本だけでなく、河原田が編綴した文書（記録資料）や、他の人が作成した文書といった1点資料も含まれている点、近世に限定されない、近世・近代と進行形的な蔵書目録である点など、今後の研究を深めていく上で貴重な情報を有していることが分かる。それだけでなく、若尾政希氏が「上は幕藩領主から下は民衆までが、同じ書物を手に取る時代、民衆の思想形成にまで書物が大きな役割を果たすようになった時代、それが日本の近世だといえる。……書物が個々人の思想形成にどのような意義をもったのかを解明する、書物の思想史研究を提起した」[8] と蔵書の重要性を指摘しているように、河原田の蔵書目録は、「書物の思想史」研究にも寄与する内容であると考えた。そのため本成果論集にも、明治32年版の蔵書目録を収録することにした（翻刻に難がある点と現物の多様性を味わってもらいたいため、加筆訂正など読みづらさはあるが、画像データとしてCD-ROMに別収録している）。

4. 研究会活動の概要

調査期間中、研究の視点を広げるため、2015年3月の沖縄調査時と同年9月の鳥取調査の際に、以下のような趣旨とプログラムで研究会を開催した。

2015年3月16日の沖縄での研究会は、「河原田盛美の視点と実践—明治と現在を往還してー」を研究テーマとして、①河原田盛美を現在どのように考えるか、②河原田盛美の視線を再考する—比較と展開、③河原田盛美の実践をどのように引き継ぐかという、3つの柱を立て、以下の内容で研究会を開催した。

高江洲昌哉「『沖縄物産志　附・清国輸出日本水産図説』刊行から奨励研究へ
　—主旨説明を兼ねて
粟国恭子「1870・80年代の沖縄と博覧会—石沢兵吾と木脇啓四郎」
國吉まこも「明治以降の沖縄における輸出品目としての夜光貝、高瀬貝等の貝殻について」
増田昭子「地方における養蚕・製糸・織物の様子（器械化の様子）」
平良次子「織物技術の伝承と保存の取り組み—南風原町の実践と課題—」

2015年9月11日の鳥取での研究会は、「水産巡回教師とはどのような任務を担っていたのか、河原田はその役割を実際にいかに遂行していたのか、その遂行は地域の水産業者や水産業の勧業において、どのような影響を与えたのか、近代の水産業において水産巡回教師はいかなる意義を有していたといえるのか等を検討する機会を設けたい」という趣旨のもと、以下の内容の研究会を開催した（写真6）。

中野泰「水産巡回教師と河原田盛美」
大嶋陽一「鳥取の珊瑚細工とその歴史」
佐々木貴文「明治日本の水産教育と大日本水産会」
伊藤康宏「19世紀末山陰の水産業振興と河原田盛美」

2015年7月には河原田の本草学知識を比較的に検討するため、土井康弘「明治期における伊藤圭介の自然研究と学術交流」というタイトルで研究会を開催した。

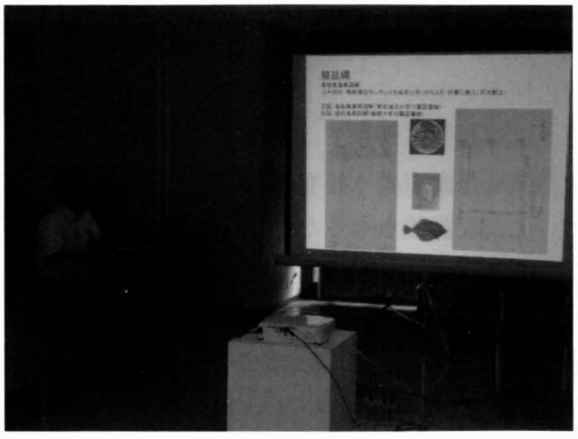

写真6　鳥取での研究会風景

これら研究会の報告内容は、拡散しているように見えるが、以下の3つの軸に分類することができ、本研究班メンバーの研究と補完するような役割を担っているといえる。

人物を軸にした同時代的比較（粟国、土井）、
政策を軸にした同時代的理解の深化のため（佐々木、伊藤）
研究課題でもある継承的視点（國吉、平良、高嶋）

また、奥会津博物館の渡部康人氏からは、近世の南会津と会津藩の関係など河原田研究に奥行きを与えるための知見を得ることができた。

研究班メンバーの活動から確認できる広がりのできてきた調査成果の一端を示すと、増田氏は調査の過程で、南会津郡において河原田と同志的に活動した渡部家の史料を閲覧する機会を得、河原田が地元の開発に貢献したという河原田に収斂する「顕彰」的な視点を超えて、「つながり」の視点から地元開発を考えていくという今後の研究につながる成果を残した。さらに中野氏の調査では県庁文書を閲覧することで、同時代の県が行った勧業政策や労農の活動[9]など、勧業政策全体の中で河原田の水産業近代化政策（水産業殖産政策）を位置づける必要を感じるものであった。

5. 河原田研究をひろげるために

今回の研究班には近世史を専門とする者がいなかったが、これまでの論述から明らかなように、近世・近代移行期の南会津の歴史的特質（社会の変容と戊辰戦争という経験）の中で河原田家の役割を解明することが大きな今後の課題といえる。

その他、河原田盛美（河原田家史料）を通して、蔵書論、由緒論、在村文化、豪農の地域経営など、今日、近世史の分野で活発に議論されているテーマとのつながりをみつけることができる。

① 地方名望家と地域振興—豪農論

近年、豪農—名望家研究も活発である。例えば、渡辺尚志は『百姓の力』（柏書房、2008年）の中で、豪農の類型化[10]をおこない、4つの象限（村・地域に根ざす—中央に出て活躍、村落共同体の共通利害を優先—家・個人の私的利害を優先）を設定し、豪農の類型化をおこなっている。そのなかの、村落共同体の共通利害を優先と中央に出て活躍するタイプの豪農を「権力—村連携」型豪農としている。このタイプの豪農について、渡辺は以下のように述べている。

> 近代に入ると、近世以上に国家の機関・政策が村・地域に浸透してくるとともに、村・地域から県や国に出仕する人も増え、村と国との相互連携が密になってきます。……（「権力—村連携」型豪農）が増えてきたことは、近代における特徴的な変化なのではないでしょうか」（232～233）

渡辺氏の分類を踏まえると、河原田は「権力—村連携」型豪農になるかもしれない。このように河原田の性格付けを考える際に渡辺の類型は参考になるが、地域の近代化とリーダーの役割を考えた場合、渡辺の視点には、地域振興における複数の（多様な）地域リーダー達がどのように連携しながら地域振興をはかろうしたのか見えにくいという欠点はあるが、近世—近代を豪農たちがどのように活動してきたのかを考える際に示唆を得る貴重な作業である。その他、福澤徹三『一九世紀の豪農・名望家と地域社会』（思文閣出版、2012年）、常松隆嗣『近世の豪農と地域社会』（知泉書院、2014年）、塩原佳典『名望家と〈開化〉の時代』（京都大学学術出版会、2014年）などが上梓されており、名望家研究は再活性化している[11]。もっとも、近年の地域名望家研究は、各家の経営や彼らの政治活動を実証的に裏付けてはいるが、「地域社会」を重視するあまり、中央に出て活躍した家の研究は乏しい。こうした中、自由民権運動に関わり国会議員になった杉田定一を輩出した杉田家を分析した、家近良樹『ある豪農一家の近代—幕末・明治・大正を生きた杉田家』（講談社選書メチエ、2015年）は、河原田家（盛美—稼吉（養子・中央政界で活躍）、盛雄（実子・地元で県会議員として活躍）の活動を分析する際に参考になる研究成果である。

② 蔵書調査を通して見えてきた点、在村文化、由緒など

前述の若尾論文が提示している蔵書研究との接続のほかに、民衆史研究会が企画した特集「近世・近代の地域社会と文化環境」（『民衆史研究』88号、2014年）のように、より広い視角も、河原

田研究の成果を発展させる上で貴重な先行研究となる（雑誌冒頭に置かれた「特集にあたって」は、研究史整理もおこなっているので河原田家の文化活動を研究する上で参考になる）。また福島県（会津地方）地域を事例にした太田素子「『継声館日記』にみる郷学『継声館』の教育」（大戸安弘・八鍬友広編『識字と学びの社会史』、思文閣出版、2014年）の郷学研究も、河原田家の活動を考える上で接点になる成果であろう。

河原田家史料には、盛美の明治期の日記である『東山日記』（明治期）のみが残されているが、盛美は幼年期より日記は書いていたようである。こうした日記を書くという行為については、高木俊輔『近世農民日記の研究』（塙書房、2013年）が参考になろう。

河原田文庫中の「家伝旧記」中に記載された図書（奥州会津四家合考、続太平記、藤姓河原田系譜伝、同一門系全（藤姓河原田一門系全）、伊南伊北系図集、御系譜、東国太平記、会津公御系譜記、南山諸系譜）などから、河原田家の由緒の問題[12]を確認することができる（但し、全てが残っているわけではない）。こうした河原田家の取り組みを理解するために、一先ず参考になる研究書を列挙すると、山本英二「日本中近世史における由緒論の総括と展望」（『由緒の比較史』、青木書店、2010年）は、1990年代から2000年代の研究状況や課題と展望も述べられており、示唆を得るものである。その他、岩橋清美『近世日本の歴史意識と情報空間』（名著出版、2010年）は多摩地域を中心にしているが、由緒の問題を「歴史意識」、「情報空間」というキーワードで分析を行っている。家の視点から記された家譜と村の視点でまとめられた村方旧記の相関―変遷過程から近世村社会の変容を明らかにした白井哲哉「近世の村と家譜・村方旧記―武蔵国の事例から」（『日本近世地誌編纂史研究』所収、思文閣出版、2004年）も、詳細な研究史整理と豊富な史料で参考になる。また、吉岡拓『十九世紀民衆の歴史意識―由緒と天皇』（校倉書房、2011年）は、地域と由緒の問題を興味深い事例を通して論じている。由緒の問題は近世の身分制秩序と関連するものであり、身分論との関連では『<江戸>の人と身分』（全6巻、吉川弘文館）のうち『村の身分と由緒』（第2巻、2010年）、『覚醒する地域意識』（第5巻、2010年）が参考になる[13]。

6. まとめ

本報告書は、研究班メンバーだけでなく、上述の研究会報告者にも声をかけ、寄稿いただいたものも掲載している。掲載論稿については、各論稿の冒頭に要旨が記載されているので、ここでは省略し、その配列について簡単な説明を付けることで、研究プロジェクトと成果論集である本報告書との関係性を明らかにしたい。研究プロジェクトは、「総合的人文学研究の成果を提示したい」と述べたように、河原田盛美の思考や実践を手掛かりに「地域振興」を考えるという目標があった。そのため、研究活動は河原田盛美に限定する、または、関連付けられるという、河原田盛美を顕彰する「収斂」的な発想ではなく、河原田の知識や活動を手掛かりに、または明治期の地域振興の史実に注目することで、それを広く現在に活かす思考を見つけていくという作業も含まれていた。もちろん、「地域振興」とは膨大なフィールドであり、それらを万遍なくフォローすることは出来ず、取り扱ったテーマに限界はあるが、かかる目標に沿った形で報告（寄稿）依頼をおこない研究会を開催してきた。よって本報告書は、研究班メンバーによる、河原田の思考・活動を扱った論稿（高江洲・中野林・中野・増田）からはじまり、研究会報告者による、河原田の思想を立体的に深めるため当時期の天産物研究者を扱った論稿（土井）、地域振興を扱った論稿（國吉・大嶋・平良）と外延的な配列になっている。そのため、論文と研究ノートについては、特段の区別を設けていない。また、内容の関係上、史料紹介を最後においている。配列は以下の通りである。

高江洲昌哉 「河原田盛美における『分類』の思想」
中林広一 「河原田盛美における知の姿」
中野泰 「河原田盛美による水産改良」
増田昭子 「河原田盛美の地方からの殖産興業」
土井康弘 「伊藤圭介から田中芳男に引き継がれた天産物研究構想」
國吉まこも 「明治初期河原田盛美の来沖とその後の沖縄県における夜光貝等貝殻類利用の変遷」
大嶋陽一 「鳥取の珊瑚細工」
平良次子 「織物の文化と産業を生かす町をめざして」
伊藤康宏 「河原田盛美の島根県水産巡回指導書『水産製造概説』」

これら論稿と河原田家所蔵史料の中から一部目録化することができた書簡と辞令書の目録データを載せている本成果論集から、研究プロジェクトの初志をくみとっていただき、お読みいただければと考えている。

付記

本プロジェクトをはじめ2012年の初訪問から今日まで、石田正子さん・太郎さんご夫婦には大変なご尽力をいただいた。その他、河原田宗興さんをはじめ調査に関して多くの方のご協力を得たことをここで感謝申し上げます。

河原田家の調査では、資料撮影など煩雑な作業を路平さん・松本和樹さん（二人とも神奈川大学歴史民俗資料学研究科院生）の御尽力を得て順調に進めることができた（特に松本さんは皆出席でご協力を得た）。この場を借りてお礼申し上げます。

今回の調査において河原田家所蔵史料を整理し、一部に限って目録化も進めた。だが、現状では、これらの史料の活用及び目録については一般の閲覧に供されていない。また、所蔵者の意向に基づき、本史料の所蔵連絡先については公表しない。なお、現時点において、本研究班によるプロジェクト終了後、国際常民文化研究機構の事務局が河原田家の史料公開状況に関する情報更新をする予定はない。河原田家所蔵史料の活用については、本論集で公開している範囲において活用していただきたい。

注

(1) 国文研の河原田盛美関係史料は、渋沢敬三のコレクションである祭魚洞文庫の一部として保管されている（『祭魚洞文庫旧蔵水産史料』、『祭魚洞文庫旧蔵史料目録』参照）。河原田家の近世期を中心とする史料は「陸奥国南会津郡河原田家文書」として『祭魚洞文庫旧蔵史料目録』の中に配列されている。『祭魚洞文庫旧蔵水産史料』には、「調査」の項目内に「河原田盛美収集書類」という分類があり、そこには「水産調査法」、「漁家永続法」、「（大阪府及兵庫県下対支海産物貿易巡廻雑記）」、「雑記集」などが置かれている。また、地域編の沖縄の箇所にも、「沖縄物産志」や「琉球秘録并鬼界島取調箇条」など河原田盛美作成・収集資料が配列されている。このように、河原田盛美史料は祭魚洞文庫内で分割された状態になっている。祭魚洞文庫における河原田史料の問題については原島陽一「コレクション史料の目録編成」でも述べられている（史料館編『史料の整理と管理』、岩波書店、1988年、357頁～358頁）。ちなみに、河原田家史料が河原田家からどのような経緯で流出し、渋沢のコレクションになったのか、これ自体面白いテーマであるが、確定するまでには至っていない。流出については口伝で伝えられているが、詳らかではない。

(2) とはいえ河原田の全体像を描いたものとして、鎌田永吉「河原田盛美・史料ノートー大久保政権の「社会的支柱」に寄せて」（『史料館研究紀要』4号、1971年）がある。その後、水産方面で池田哲夫「水産翁　河原田盛美についてーその略歴と著作等—」（『民具マンスリー』23巻1号、1984年）、沖縄

については齊藤郁子「河原田盛美の琉球研究―内務省琉球藩出張所と万博―」(『沖縄文化研究』35号、2009年)がある。それぞれ水産・沖縄という各テーマに入る前に河原田徳作編の『河原田盛美履歴』を前提にし、残存史料で補強しながら河原田の活動軌跡を紹介している体裁になっている。今回の調査で、辞令書類といった職歴に関する元データの撮影、草稿(写真5)などをみつけることができたので『河原田盛美履歴』に対する史料批判は今後の課題といえる。

鎌田論文は河原田の階級基盤を析出することに重点を置いているので、河原田家の経営に注目をしているが、盛美の活動について十分な言及をしているわけではない。例えば「大久保政権のもとで整備され、定着しつつあった官僚機構の中で、末端行政を担う盛美の実務―農林水産行政における技術指導者としての転進、いや定着が始まったと思われる」(118頁～119頁)とまとめているが、農商務省時代を十分に検討せずに、このようにまとめることができるのかという点、官僚機構を一枚岩に捉える視点や各官僚の個性を取捨している点、河原田の位置づけも含め、今日では再検討が必要であろう。

(3) 本研究班メンバーをつなげる役目を果たしたのは、増田昭子氏であるが、増田氏は南会津郡伊南村隣村の南郷村出身であり、『伊南村史』の民俗編に関わるなかで河原田家の調査もおこない、河原田盛美に関する史料が残されていることを知っていた。そうした中、南会津出身の河原田が明治初期に沖縄へ行ったことに関心を持ち、その関連で国文学研究資料館に所蔵されている河原田盛美関連史料(その中の『沖縄物産志』)に注目し、『沖縄物産志』の翻刻公刊に向かっていったという経緯がある。

(4) 沖縄関係資料は、増田氏の紹介で小野まさ子氏らが2000年頃に河原田家を訪問し、概要をまとめている(「史料調査報告その一河原田盛美関係資料紹介」(『沖縄県史だより』12号、2002年)。これ等調査のあと中断していたが、東洋文庫メンバーによる河原田家の調査が再開したころ、久米崇聖会創立100周年記念に合わせて、沖縄県立博物館・美術館で2014年度に開催された「久米村展」に、河原田家に所蔵されている梁鳳儀、梁得功、鄭其昌の軸が展示された。

(5) 前掲鎌田論文(118頁)。

(6) この定義は杉本つとむ『江戸の博物学者たち』(講談社学術文庫、2006年)の記述を参照した。もっとも、「本草学的知識」とは便宜的なものであり、「博物学」など名づけについては研究班内部でも議論があった。河原田を知識人と名付けることは簡単だが、「遊客」的知識人ではなく、あくまでも家の維持・発展を主眼にする「実学」重視であり、佐藤信淵の学に傾倒している。どのようなタイプの知識人でありその思想的特徴は何なのか、この点を明示的に示そうとした経緯の一端である。今後の議論を踏まえ、「本草学的知識」の内実を再検討したいと考えている。

(7) 河原田の蔵書目録は明治32年の「河原田文庫目録」と、大正2年の「再再興河原田文庫目録」がある。これ等目録の概要については、前掲鎌田論文の注12と注15で言及している。ただし、鎌田論文では書画目録については言及していない。

(8) 若尾政希「書物と民俗のはざまで」(『日本思想史講座5　方法』、ぺりかん社、2015年、153頁)。もっとも、本論文はタイトルから分かるように蔵書(読書経験)に限定するのではない。論点を整理して、次の3点(1)読書による知との出会いと葛藤の様相を明らかにすることと、(2)継承と葛藤を明らかにするために、民俗的基盤の掘り起こしと、(3)現実の体験が思想形成に果たした役割(162頁)をあげて、「近世を生きた多様な人々の思想形成の過程を解明する」ための課題を示している。なお、この論文は短文ながら、「書物の思想史」研究の整理がなされており、研究の軌跡と課題を確認することができる。

(9) 資料閲覧で感じた課題であったが、その後鳥取藩の庄屋出身の老農中井太一郎を扱った大島佐知子『老農・中井太一郎と農民たちの近代』(思文閣出版、2013年)という書物の存在を知った。農業と水産業という違いはあるが、政治とは別の場所で「立国」の活動をおこなった人物として河原田の活動と比較するうえで興味深い事例である。

(10) そのほかに①村との共生志向型豪農、②自己経営最優先型豪農、③「草莽の志士」型豪農を設定している。

(11) その他、国民国家論にも目配りしながら、「名望家」研究の整理をおこなった渡辺尚志『幕末維新期の名望家と地域社会』(同成社、2014年)の序章「近世・近代転換期村落史研究の到達点と課題」も参考になる。

(12)『伊南村史　第3巻資料編二(近世)』(2003年)の第9章は「系図、由来書他」ということで、河原田以外の系図なども収録されている。

(13) 東洋文庫『沖縄物産志』の解説のなかで、河原田を士族と明記したが、この点に関して、奥会津博物館の渡部氏より疑義をいただいた。御蔵入地における「身分」の問題について今後深める必要がある。